

平成 30 年 6 月 22 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370345

研究課題名(和文) アメリカにおける都市移民の口承文化：1880-1930年代の南欧東欧移民を中心に

研究課題名(英文) Oral Tradition and its Transmission of Southern and Eastern European Immigrants in Cities from 1880s to 1930s America

研究代表者

ウェルズ 恵子 (WELLS, KEIKO)

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：30206627

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：南欧東欧の都市移民の口頭伝承は困難だった。経済的苦境に加え出自の明示はマイナスに作用する場合が多く、移民はアメリカに進んで順応しようとした。二世以降はアメリカで教育を受け英語が母語になったので口頭伝承はさらに困難になった。他方、多数のアイルランド人を含めた1880-1930年代の「新移民」二世は、親世代が経済的成功へ邁進する傍らで、英語を十分に理解しない異文化出身者らにも享受可能な、宗教性が希薄で言語以外の表現技術も磨いた感覚的文化を創出していく。その例がミュージカルでありジャズであり、米映画の流行へ繋がった。感覚的で道徳的に保守的な大衆芸能文化の伝統は、戦後日本の文化にも影響を及ぼした。

研究成果の概要(英文)：The oral tradition of immigrants from Southern and Eastern Europe from 1880s to 1930s wasn't vigorously transmitted to younger generations. This is because the immigrants struggled in highly competitive society and were more willing to assimilate with others in the States. For the second and younger generations English was their native tongue, so the direct transmission of European oral tradition became even more difficult. On the other hand, younger generations created new entertainment genres that could be enjoyed by those who were handicapped with English and lacked American cultural background. Musical shows and Jazz music are representative examples. They are not religiously loud and are not much dependent on language in appealing to the audience. This characteristic of American mass entertainment culture, that is, it is more intuitive and morally conservative, was transmitted to Hollywood films. Interestingly, Japanese post-war mass culture inherited similar characteristics.

研究分野：アメリカ文学・文化、比較文化

キーワード：entertainment culture Musical shows immigrants popular culture songs music religion Jewish

1. 研究開始当初の背景

1880年代から1930年代までの半世紀には、ヨーロッパにおける政治的混乱を背景にアメリカへの移民が急増した。時期を同じくして工業国として発展しつつあったアメリカ合衆国で、これらの人々は主に都市部の工場労働者やその他の都市関連産業従事者となった。よく知られているアイルランドからの移民の他には、東ヨーロッパと南ヨーロッパからの移民が多かった。彼らのほとんどは母国では農業従事者で、教育レベルは高くはないが無教育でもなく、同時に豊かな口承文学の伝統をもっていた。優れた語り手はひとりでも何百というおとぎ話や歌を記憶していたようで、現存の学術資料は記録者が先人の口承文学世界に圧倒されて資料化したものである。しかしこうした資料は地方の特定地域にあった民族コミュニティで収集されている。

ところで、アメリカにおけるヨーロッパ諸国の口承文芸収集は、学術的に貴重な意味を持っている。なぜなら、欧州各国の民族文学収集は当時の政権の意向や民族主義に大きく左右されていたからであり、収集者の思想や時代の要請が記録に刻み込まれている。農民の困窮を無視して彼らの文化を美化したり、ロマン主義や中産階級の道徳によって内容が書き換えられ、残酷で不道徳な部分が削除されたり、語り手や歌手には関心を払わないなど、学術資料としては不足な部分が多い。一方アメリカでの収集は、移民文化がアメリカ文化の基盤だという考えが調査記録の原動力となっており、口承伝承を学術目的で記録保存している。こうしたことを背景に、特定の地方ではなく、都市での口承伝承の資料収集を目指そうとした。

1930年代を本研究課題の区切りとしたのは、それがアメリカ文化に重要な転換期だからである。30年代には無技能の労働移民が主要な都市人口の実質的な一部となり、移民のコミュニティがモザイクのように存在する多文化状況で貧困層の文化が揺籃された。不況の時代へ突入したこともあり、流入する移民数は減少する。歌や民話の提供者の移民時期も1930年代が区切りで、主な資料は彼らの子どもの世代によって1960,70年代に編纂されている。また30年代にはヨーロッパの口承伝承のあり方も大きく変化したと筆者は観察し、その点もこの研究で立証を試みる計画であった。

2. 研究の目的

1880-1930年代にアメリカ合衆国の都市へ移住したヨーロッパ系移民が伝えた口承文学（とくに民話とバラッド）を調査、分析することを当初の目的とした。物語の内容や、語る行為そのものが労働者層移民の経験とどう関わっているかを明らかにする計画であった。追跡する予定であったのは、次の4点である：(1)母国の民話とバラッドのうち、アメリカで伝承されたものに限って共通する特徴

はあるのか、(2)搾取の激しかったこの時代の都市労働と、移民後の口承文学展開との関連性（一定期間後は文字文学と音楽文化における展開）、(3)受容された欧州系の民話とバラッドのアメリカ大衆文化に与えた文学的影響、(4)個別の民族性・出身地域性にみられる特徴。これらの分析を通して、移民文化とアメリカ文化の世界的波及の関連と、口承文学の現代的意味を考察する。

1880-1920代の欧州移民は、口承文化を生活の一部としながら文字文化とも関わりを持つ労働者層で、都市の口承文学は口承と文字との境界域を共通地盤にして展開した。従って、こうした新しい型の口承文学の特質をとくに明らかにし、現代的意味を探り出すことが本研究の到達目標であった。

3. 研究の方法

初年度は、当初の計画に従って、ハンガリー、ポーランド、イタリアを中心に当地の言語文化・音楽文化的特徴を探り、アメリカ文化への影響を読み取ろうと努力した。ニューヨークに当該の資料が得られるかどうか、聞き取り調査が可能かどうかも探った。ここで資料の乏しさや聞き取り調査の困難さが明らかになった。その結果推測できたのは、英語を母語としないこれらの国からやってきた移民の文化は、アメリカにいる文化享受者の期待と比較的容易に融合して（祖国の文化を忘却したふりをして）、縦型の口承伝承を避けアメリカに融合した新たな文化を生み出したのではないかということだった。表現行為において言語の果たす比重は、ダンスや絵画、音楽などの非言語表現と同じかそれそれよりも軽いところにあると確認された。

第二年度は、紡績工場の労働者層移民の歌を検討し、同時に移動性労働者の歌も調べたが、目標としている「新しい型の口承文学の特質」に近づくことができなかったため、研究対象をミュージカルに集中することに決め資料収集を始めた。ミュージカルショーは、1910年代までに子供として移民してきた人々やこの時代に移民した人々の子供たちが成長して作り上げた一大産業といえる。ミュージカル歌謡は、世界的に大きな影響があったアメリカのポピュラーソングの源泉であり、その歌詞の特色と作者たちのバックグラウンドとの関係をつかめるはずだと考えた。

この時代のミュージカルソングが世界的に多くの人々の心を捕えた大事な理由の1つに、言語や文化の違いを超えることを可能にしたイメージの単純さや感傷性やメッセージのわかりやすさがあった。そこで、第三年度は、ニューヨークで人気を博したミュージカル歌曲の作詞者と彼らの歌詞に焦点をあて研究した。既存研究ですでに指摘されてきたことではあるが、アメリカの大衆文化、とくに20世紀初頭のニューヨークを中心としたミュージ

カルとポピュラーソングの分野で、東欧から移住したユダヤ人が活躍した。主な作詞家はこれらの人々である。ニューヨークで、作詞家のインタビューを聞くなどの調査を行い、20年代から40年代のブロードウェイ黄金期にミュージカルの占める割合は10%程度であったことや、それにもかかわらず作詞作曲ともに優れた作品が続出したこと。この背景に、ユダヤ人家庭がステータスシンボルとしてこぞってピアノを購入したことや、レコードが購入しやすくなったこと（3枚で1ドル、つまり25ドルあれば75枚のレコードが買えた）が理由にあることなどが、明らかになった。

最終年度は、以上のような研究経過を踏まえて、以下に述べる研究成果を得た。

4. 研究成果

南欧東欧の都市移民が口承の伝統を保つのは極めて困難であった。経済的苦境に加え、各自の出自が明らかになることはむしろマイナスに作用する場合が多かったために、移民がすすんでアメリカに順応しようとしていたためであろう。移民後に、同地域の出身者が閉鎖的なコミュニティを形成していたとは限らない。また、二世以降はアメリカで教育を受け英語が母語になりコミュニティを超えた交流も盛んになったので、移民の出身国と強いつながりを保つ種類の口頭伝承はさらに困難になった。他方、南欧東欧に限らず多数の 아일랜드人を含めた1880~1930年代の「新移民」の二世は、親の世代がアメリカでの経済的成功の邁進する傍らで、英語を使いつつ英語を十分に理解しない人々にも教授可能なユニバーサルな文化を創出していく。その一つがミュージカルショーとその歌謡であり、ジャズであり、続いて映画の流行へとつながる。

アメリカの大衆的芸能文化の特質は次のようにまとめられる。

- 1) 本来、芸能は宗教祝祭的なものであるにも関わらず、アメリカでは出発段階から非宗教的で、代わりにどう行動すれば無難に生きていけるかが表現されている。この傾向は極めて現世的、表層的とも言えるが、その反面でアメリカ文化を現代の世界で広く受け入れ可能なものにした。ディズニー映画に見られる現世的で保守的な価値観はその代表であろう。ディズニーはアメリカ主流文化の産物ではあるが、WASPの子供達よりも新移民の第二世代が多数これを楽しみ影響を受けている。
- 2) 音楽は器乐的な発達が著しい。音楽文化的感覚のほうで、歌詞の享受に必要な言語的感覚より世代交代が早いと思われる。
- 3) 歌詞は宗教性が希薄、恋愛やアメリカ中心の内容表現を共通基盤とする。使用言語は英語ではあるが語彙も文法も簡単で単純なものが多く、複雑な内容や個人

的な強い感情表現を含まない。比喻も異文化間で共通して理解可能な単純なものである。

- 4) 宗教的行事、例えばクリスマス等に関する歌の場合も、モチーフを非宗教的非民族的に書いてある。「クリスマスツリー」や「雪」を前面に出して、イエス・キリストに関する言及を含まないなど、特徴を持った歌が流行した。
- 5) アメリカ大衆芸能文化は宗教性の希薄さ、保守的なモラルの称揚、メッセージの伝達に言語が果たす役割が少ないことなどで特徴付けられ、その性質は戦後の日本文化にも通じており、この共通性は研究に値する。

以上のような分析の結果、アメリカの都市型大衆娯楽文化について、特にその発展に重要な役割を果たした要素を見るのであれば、移民の出身別文化に注目するのではなく、大衆娯楽文化全体の動きをまず把握した上で、その動きに出身地別の繋がりがどう相互に影響し、「アメリカ文化」と認識されるものを形成していったかを観察する必要があるという結論に至った。そしてまた、現代に及んで影響が大きくしかも研究が未熟な分野のひとつが、 minstrel show と初期のミュージカルショーであると確信できた。

この時点で、従来の民族別・地方別による伝統文化収集・研究は、アメリカ人のルーツアイデンティティ確立に寄与するものではあっても、アメリカ文化のダイナミズムを解き明かすには適切な研究方法であるとはいえないことがわかった。むしろ、アメリカ独自の文化と目されるジャンル（先ほど指摘した、minstrel show とミュージカルショーなど）のルーツをヨーロッパに探る、アメリカからヨーロッパを振り返る視点と、異なる文化背景を持つ移民やその二世、三世が特定の文化ジャンルの醸成や発展にどう協働したかという、文化交流史状況を観察するのがふさわしいと考えることができる。

19世紀から20世紀前半には、ヨーロッパからアメリカに大量の移民が流入し、かつ2回の世界大戦でヨーロッパへ多くのアメリカ兵士が移動した。アメリカ国内では、南部から北部へ向かうアフリカ系アメリカ人の大移動もあった。minstrel show と初期のミュージカルショーは、こうした社会背景のもとで醸成されている。それは、「人々とともに移動して熟成した芸能」ということができる。さらに、これらの芸能は、「音声と身体で表現される文学」として捉えうる。そのとき、言語を媒介とする芸能が、第一言語が異なる移民やアメリカ以外の文化伝統をもつアメリカ育ちの人々によって発信され、かつ受容される経過と意味は明らかにされる必要がある。

アメリカの娯楽芸能文化を「声と身体で表現する文学」として位置付け、ヨーロッパとの文化交流史から観察することが、本研究に

必要な展開方向である。

また、日本におけるアメリカ大衆文化研究は、アメリカの研究と呼応して、そのアメリカ性を強調する方向に進んできたけれども、本研究が強調するのは、むしろ芸能文化の越境性や連続性である。その際考慮したいのが、以下の点である。

- 1) 言語の違いをどのように口頭作品にレベル化、および芸能化したか。
- 2) 言語の違いに伴う身体の動き（ダンスに代表される）や文化背景を示唆する仕草や動作をどのように口頭作品にレベル化、および芸能化したか。
- 3) 宗教の違いとそれに伴う差別構造をどう処理したか。
- 4) 社会階層の違いを作品中にどう利用したか。
- 5) 文学的な工夫。
- 6) 社会・政治状況の反映。
- 7) ヨーロッパにおける諸芸能の利用と発展。
- 8) 芸人および創作者の移動と協働の状況。

以上、本研究は、期間内に新たな具体的発見や事実を明らかにすることはできなかったけれども、世紀転換期のアメリカ芸能に関して、状況的な外枠を埋めることができた。これを背景として、継続する研究課題によって都市移民と芸能との関連、ヨーロッパ文化との交流史を浮き彫りにする研究が可能となった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

- (1) ウェルズ恵子、アメリカは歌う、陽気に、力強く：近代化の渦の中で、Vintage Clothing 第1037号、査読無(依頼原稿)、2014年、16-33頁

〔学会発表〕(計 4 件)

- (1) ウェルズ恵子、アメリカの歌：源流を探る、京都市市民講座「虹の探求/多用の表現を探る」(招待講演)2018年
- (2) ウェルズ恵子、音楽における黒人文化：アメリカ奴隷制の時代からキング・オブ・ポップまで、平成29年度人権問題都民講座「音楽から人権を考える」(招待講演)2017年
- (3) ウェルズ恵子、スコットランド民謡の越境性と土着性を巡って、日本カレドニア学会全国大会(招待講演)2015年
- (4) ウェルズ恵子、フォークテイルの面白さ、「流体としてのことば、文化、地域」連続講演会、2015年

〔図書〕(計 3 件)

- (1) ウェルズ恵子(編・著)、サイモン・J・プロナー、ジャック・サンティノ、荒このみ、リサ・ギャバート、坂下史子、トーマス・マケイン、江川ひかり、関口英里、小長谷英代、ソンドラ・ウィーランド・ハウ、ディーン・L・ルート、宮下和子、マイケル・スプーナー、ミドリ・トーキン、アレン・クリステンセン、カズコ・トーキン、『ヴァナキュラー文化と現代社会』、思文閣出版、2018年、336頁(v-x, 87-112, 115-138, 293-312, 313-314)
- (2) ウェルズ恵子、リサ・ギャバート、『多文化理解のためのアメリカ文化入門』、丸善出版、2017年、197頁
- (3) ウェルズ恵子、『アメリカを歌で知る』、祥伝社、2016年、275頁

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

- (1) 研究代表者
ウェルズ 恵子 (WELLS, Keiko)
立命館大学・文学部・教授
研究者番号：30206627